

## 会員紹介：中島 千秋さん

### 印象に残っている言葉

「信頼できる人をつないでいけ。」

「開発は人である。」

「この機械はシンプルだ。大企業よりも中小規模の企業がアフリカには丁度いい。」

### 私の略歴



大阪府立天王寺高校卒業後、20回以上読んだ中学以来の愛読書であるトルストイの「戦争と平和」を原文で読みたく思い、大阪外国語大学ロシア語学科に入学、1975年に卒業。日本C. H. ベーリンガーゾーン株式会社で、人事部長秘書と翻訳業務に携わる。1978年に結婚。二人の娘に恵まれる。次女が大学に入学後、勉強を再開。時事英語を学ぶ中で、世界の情勢に関心を持ち、大学の聴講と共に、各種セミナーに参加。（母校同窓会主催の月例会、東京外大FLS会、東大DESK主催のチュートリアル。中東調査会。鳩ヶ谷中央アジア勉強会など。）

2003年、JVC（日本国際ボランティアセンター）のアフリカボランティアチームに加わる。TICAD市民社会フォーラムの立ち上げにも参加。2004年、SRID本会に入会。2005年、南アフリカのスタディツアーでソウェトに民泊。2006年より3年連続で、国連大学メディアセンターで、持続可能なアジア太平洋に関する国際フォーラムに参加し、気候変動について学ぶ。

### SRID入会のきっかけ



国際協力フェスティバルで、SRID学生部主催のブースに入り、その内容に興味を覚える。学生部幹部の西張さんに、「勉強会もやってますよ。どうぞ。」と声をかけられ、学生部主催の勉強会に参加。学生ではないのに参加することを申し訳なく思い、一般に入れてほしいと申し出、本会の存在を知る。2004年春、入会審査手続きを無事終え、本会員となる。

国際協力フェスティバル（日比谷公園）  
（現グローバルフェスタ）

### 私の国際協力経験

今、BOPビジネスが隆盛である。ちょうど、8年前の2005年、アフリカでBOPビジネスを興そうとして中断、その後、当該国での政争から頓挫してしまった未完

のプロジェクトの経験がある。今のBOP隆盛は、私にとって、隔世の感がある。経歴も肩書もない「普通の主婦」である私が、上記のようなプロジェクトを企画し、疾風怒濤のような日々を体験できたのは、表記の「印象に残った言葉」にあるように、「信頼できるチーム」の連携があったからである。

2005年7月、萩原さんのご紹介でマラウイ大使のSRID懇談会が開催された。そこで、開発の芽を求めて各地を訪問されている大使に、医療の研究開発の進んでいる富山に、何故行かれていないのかと質問した。その夜、大使から、大使館でもっと話が聞きたいとのメールが届いた。「どうしよう。特に資料がそろっていないのに。」

そこで、父に電話すると、森田直賢先生にお手紙を書いて、事情と目的を書き、ご相談しなさいと言われた。森田直賢（もりた なおかた）富山医科薬科大学名誉教授は、その優しいお人柄から、皆さんから、チョッケン先生と呼ばれている。医食同源を勧め、「薬になってやくだつ野菜」というご本まで出版されており、優れた粉碎機械を持つP社の健康食品開発にも相談に乗っておられた。すぐに、手紙を直賢先生に書くと、折り返し、ご返事がきた。大使館に行くにあたって、一人では心細いので、萩原さんに同行していただけるよう頼んだ。大使館に行くと、もう萩原さんと大使は、談笑の真っ最中であった。そこで、大使に、「直賢先生のお人柄を見ていただきたいので、富山まで、一緒に行っていただきたい。」と申し上げると、「もちろん。」とご返事が返ってきた。人を見てほしいという願いに即答であった。

8月、富山に行き、まず、県知事に面会をし、滑川市の深層水プールなどを視察後、P社の工場に向かった。機械を見て、大使の第一声が、「この機械はいい。シンプルだ。アフリカに合う。」であった。P社の説明を伺うにつれ、商品開発は、奥さまとお嬢様の担当で、キッチンでされていること、また、岐阜大学、滑川市と共同で、商品の安全性、機械の保証なども行っていると聞き、これは地域に根差した科学技術開発で、面白いと思った。直賢先生から、薬草のお話もしていただくと、大使から、マラウイには、こんな薬草があり、沢山生えていて、みんな手でちょっと摘んで食べたりしているというお話があった。会議は、3時間以上も続いたと思うが、その間に、直賢先生と大使の間に、お互いの人柄に対する信頼のようなものが生れたのを感じ、飛行機で日帰りという強行軍であったが、富山まで来てよかったと思った。



直賢先生からいただいた写真のポストカード

その後、岐阜大学の先生方とも、お会いし、連携が進んだ。直賢先生から、今までのものを文書にまとめなさいと言われ、「薬草の国際研究協力と食品加工製造業振興によ

る栄養改善と経済力の向上」を作り、それを持って、あちこち、相談に回った。UNIDO 当時の大嶋東京所長も、考えてみましょうと言ってくださったのは、有難かった。そうこうするうちに、大使ご帰還の日が迫り、ご帰国後は、メールでのやりとりも、すんなりといかず、時間とともに頓挫することとなった。今思い出すと、大使の「大企業はアフリカには向かない。中小という規模が、ちょうど対話の相手として最高である。」という言葉は印象深い。

この幻といってもいいプロジェクトには、素晴らしい副産物が生れた。日本に持ってこようとした、あのマラウイの薬草を混ぜて作った丸いパンで、マーガレット大使夫人の創作である。帰国後、「SHIBUYA」というレストランを開店されたと聞か、そこでも、販売されているのではないだろうか。まさに、アフリカの、アフリカ人による、アフリカのためのBOPビジネスである。

私には、他にも、アフリカから日本に来ている友達がいるが、彼らとの協同も模索したが、うまく進まなかった。その友達から、「信頼できる人をつないでいけ。」と言われたのが頭に残り、マラウイ大使との協同の際にも、信頼できる人をつないでいこうとした。直賢先生も、「中島さん、人の道というものが大事なんですよ。それに外れると、うまくいきません。」と言われた。奇しくも、私が信頼を寄せるアフリカと日本の方から、同じような意味合いの言葉を聞くのは、不思議なことであった。

## 南アフリカを訪問



2005年、JVCのボランティアチームのメンバーと共に、ソウェトで活動するNGOを訪問する。何故か、戦後まだ貧しかったころの日本を思い出した。舗装されていない道、裸足で元気に走り回る子供達。黙々と働く中年女性達。洗濯バサミできちんと干されて風にたなびく洗濯物。怖いという感じは全くなかった。

南アフリカのスタディツアーにおいて

## 人と人を繋ぐもの

信頼できる人の繋がりといえば、プロの開発集団であるSRIDに、何故、私のような「普通の主婦」が混じっているのか、不思議に思われる方も多いに違いない。これは、ドアを開けてくる人が、次から次へとつながったからである。学生部当時の幹部であった西張さん、野上君、そして当時の事務局長の三上素子さんの「どーぞ。」という一声である。高瀬先生の「入れてあげましょうよ。」の一言で、入会が決まったのを覚えている。高瀬先生とは、そのとき、TICAD市民社会フォーラムで、立ちあげからの同志のような関係であった。SRIDに入会したあとも、現今井会長から、「SRI

Dはね、面白い意見を言う人であればOKなのですよ。」といわれ、肩書や経歴ではなく、何を考え、何を発言するかに重きを置く、ある意味で、厳しい団体だということもよくわかったが、その上下のない不思議な雰囲気から学ぶことは多かった。入会したての懇談会後の集まりで、神田さんから、「開発はヒトですよ。」と言われた。不思議なものである。開発というと、ストラテジーなどの用語が飛び交うが、現場からは、「人」が大事だというメッセージが届く。

今、SRID元学生部の中に、アフリカや東北で、BOPビジネスを興そうと、また実際に起こしている人達がいるが、彼らの人柄をよーく知っている私は、彼らのすることに間違いはないと自信を持って言える。彼らは、決して、相手が傷つくようなことはしない。対等のパートナーというよりも、友人としての関係をビジネスの中でも、築いていくであろうと確信している。財政赤字に苦しむ日本が、世界に発信できるものは、人としての信頼の構築が何より開発の現場では大事だという、シンプルなメッセージではなからうか。

### アフリカが抱える問題は。。

最近、海外に出ていたアフリカ人が、母国の復興を目指して戻りつつあるという話を聞いた。アフリカ人自身による開発が一番望ましいのは明らかである。ただ、アフリカで一番問題だと思われるのは、分断される社会構造のように思う。ケンネ元会員によれば、社会は上層部と下層部に分かれ、両者の往来はなく、その間に目に見えないガラスシーリングがあるという。世界銀行のジョン・ペイジ氏は、プライベートセクターが、社会の流動化を促進すると思っておられるようだが、果たして、BOPビジネスで、アフリカの分断する社会構造の問題が解決されるのであろうか。

### 家族のこと



女性三世代 in NY

真ん中の孫の日々の姿を愛でながら、ふと、娘たちの幼い頃と自分の若き頃を思い出す。昔と今がオーバーラップするような不思議な体験をしている昨今である。